台大日本語文研究第 25 期
2013 年 6 月、頁 45-62
2012-10-20 收稿、2012-12-12 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP.2013.25.45

試論五山文學對黃庭堅的接受與變化
—以《山谷抄》為主—

朱秋而*

摘要

北宋詩人黃庭堅（1045-1105）在日本五山禪林備受推崇，前後有許多僧人對其詩集進行講解與注釋，後世稱這類文獻爲「山谷抄」，屬於室町時期「抄物」的一種，在日本多被學者拿來進行中世的語言或音韻之相關研究。

本論文想從文學或文化傳釋與比較的角度，深入檢討分析《山谷抄》的文本內容，重新審視五山禪僧如何理解黃庭堅這位江西詩派大家，同時佐以中日比較對照的觀點，釐清五山僧人形塑的黃山谷意象背後所蘊含的文化意義。

關鍵詞：山谷抄、五山文學、發願文、坐禪、飲茶

* 台灣大學日本語文學系副教授

On the Acceptance and Changes of Huang T'ing-Chien In Gozanbungaku: Based on Sankokusyo

Ju, Chiou-er*

Abstract

The poet, Huang T'ing-Chien (1045-1105) in the Northern Song Dynasty, is held in high esteem by Gozan monks in Japan. There are many monks explaining and annotating his poetry. The later generations regard this sort of literature as "Sankokusyo" belonging to a kind of "Syomono in Muromatsi age. The scholars usually use "Sankokusyo" to conduct studies related to language or rhymes and rhythms.

This thesis will inspect and analyze the text of "Sankokusyo" from the viewpoints on literature or cultural transmission and comparison. How Gozan monks had understood the master of Jiangxi poet society, Huang T'ing-Chien, will be re-examined with the help of the viewpoint on the Sino-Japanese comparison and contrast with an eye to clarifying the cultural meanings of Huang T'ing-Chien's image portrayed by Gozan monks.

Keywords: Sankokusyo, Gozanbungaku, Hotsuganmon, Zazen, tea drinking

* Associate Professor of the Department of Japanese Language and Literature, National Taiwan University

五山文学における黄庭堅の受容
—『山谷抄』を中心に—

朱秋而*

要旨

北宋の詩人黄庭堅(一〇四五～一一〇五)の詩集は、日本室町時代の五山の禅林で広く読まれていたことは周知のとおりである。長い間、多くの五山の詩僧たちが黄庭堅の詩集について講義を行い、注釈を加えた。後世はこれらの講義録や注釈書類を、「山谷抄」と称し、中世室町期の抄物の一つに数えられる。

小論は『山谷抄』の諸本を読み比べ、文学や文化伝播の視点から日本の五山禅林における江西詩派の大家である黄庭堅の受容とその変容を考え、そこから五山の禅僧たちがどのように山谷や山谷詩を理解したか、そして彼らの山谷像の文学史的、文化史的な意味を明らかにしたい。

キーワード：山谷抄、五山文学、発願文、坐禅、飲茶

* 台湾大学日本語文学科副教授

五山文学における黄庭堅の受容
—『山谷抄』を中心に—

朱秋而

一、はじめに

北宋の詩人黄庭堅(一〇四五～一一〇五)の詩集は、日本室町時代の五山の禅林で広く読まれていたことは周知のとおりである。長い間、多くの五山の詩僧たちが黄庭堅の詩集について講義を行い、注釈を加えた。後世はこれらの講義録や注釈書類を、「山谷抄」と称し、中世室町期の抄物の一つに数えられる。山谷つまり黄庭堅の詩は、なぜ五山の僧侶たちに好まれたのか、その理由について、倉田淳之助氏は『黄山谷』(漢詩大系 18、集英社、一九六七年、二一頁)の解説の中で次のように述べている。

> わが五山僧殊に黄龍派の京都、建仁寺の僧が山谷詩集を愛読したのは、仏教思想を含む為であることはいうまでもなく、又山谷の詩に頻繁に引かれる荘子の思想、人間の苦を去って虚無自然に導こうとするところは、仏教の解脱と相似た点のあることも忘れてはならない。

倉田氏は山谷の仏教信仰と詩に表れる荘子の虚無自然に向かう思想も仏教の解脱に共通しているところがあることによって親近感が抱かれたという。かくして山谷の詩はその師に当たる蘇東坡と同じく日本の五山詩僧に愛好され、室町時代を通じて広く流行していたのである。

特に禅宗黄龍派の京都建仁寺の場合は、黄庭堅の詩集や詩論を詩の模範として仰いでいた。建仁寺の中の塔頭の一つ両足院には当時黄庭堅の詩作を講解した禅僧達の講義録、いわゆるノート類がまだ多く残されている。「抄物」の第一人者である大塚光信教授らの調査による[1]と、現存する『山谷抄』の諸本や種類は次のようである。

---

[1] 大塚光信編『続抄物資料集成』第十巻「解説·索引」中「山谷抄」の部分、頁 91-110。

1. 『山谷抄』、 両足院蔵、抄本、二十巻六冊。
2. 『山谷詩集鈔』、 正保板本、二十巻七冊（高羽五郎「抄物小系」によって収録）。
3. 『黄烏鉢抄』、陽明文庫蔵、抄本、二十巻五冊。
4. 『黄氏口義』、両足院蔵、 抄本、二十巻二十二冊、林宗二手抄本。
5. 『谷詩抄』、抄本、二十巻二十一冊。

五山の「抄物」は室町時代の口語体で書かれた資料として、日本では中世の語学資料として利用されることがほとんどである。その中で「山谷抄」を対象にした研究は少なく、調べた限りわずか次の二点しかない。

1. 石川真代子「『山谷抄』についての一考察」、『滋賀大国文』第２２号。
2. 土井洋一「林宗二・宗和の手になる抄物のことば」、『学習院大学文学部研究年報』第２５号。

小論は『山谷抄』の諸本を読み比べ、文学や文化伝播の視点から日本の五山禅林における江西詩派の大家である黄庭堅の受容とその変容を考え、そこから五山の禅僧たちがどのように山谷や山谷詩を理解したか、そして彼らの山谷像の文学史的、文化史的な意味を明らかにしたい。

二、山谷の「発願文」

黄庭堅の最初の結婚は二十四歳のときで、しかし結婚してわずかに二年あまりで妻を病でなくした。二十九歳の年に師である謝景初の娘を娶り、不幸にも六年後、詩人三十五歳のときに妻はまた世を去った。ほぼ十年の間に二度も妻を失う悲しい経験をしたことと、長年の信心深い仏教信仰もあって、山谷は元豊七年三月、四十歳の年に泗州（今の江蘇省臨淮県）の僧伽塔の前で「発願文」を書き、「酒・肉・女色」を断つことを誓った。

山谷詩の措辞（言葉遣い）、用事（典故や故事の利用）や思想など

が工夫されて複雑に組み合わさっている作品が多いので、新しい境地を開いたものの、難解な一面もあるとよく言われる。早くも南宋の任淵の『山谷詩内集』が刊行され、山谷詩の重要な注釈書として長く重宝されている。日本でも南北朝時代に陳師道の詩集と合わせた『黄陳詩集注』を定本として、五山版といわれる『山谷黄先生大全詩註』[2]が翻刻されている。時代が下って江戸初期になると、三種類の古活字版が広く流布し、寛永六年（一六二九）に京都で訓点が付いている『山谷詩集注』[3]も世に刊行された。引用は少し長いが、一番古い山谷詩注任淵の『山谷詩内集』にある序文「陳詩注原序」[4]を次に掲げておこう。

> 六経所以載道而之後世而詩者、止乎礼義、道之所在也。周詩三百五篇、有其義而亡其辞者、六篇而已。大而天地日星之変、小而蟲鳥草木之化、厳而君臣父子、別而夫婦男女、順而兄弟、羣而朋友、喜不至瀆、怨不至乱、諫不至訐、怒不至絶、此詩之大畧也。古者登歌清廟、会盟諸侯、季子之所観、鄭人之所賦、与夫士大夫交接之際、未有舎此而能達者。孔子曰為此詩者、其知道乎。又曰不學詩、無以言。蓋詩之用於世如此。周衰、官失學廃、大雅不作久矣。由漢以来、詩道浸微、陵夷至於晉宋齊梁之間、哇淫甚矣。曹劉沈謝之詩、非不工也。如刻繒染穀、可施之貴介公子、而不可用之黎庶。陶淵明韋蘇州之詩、寂寞枯槁、如叢蘭幽桂、可宜於山林、而不可置於朝廷之上。李太白王摩詰之詩、如乱雲敷空、寒月照水、雖千變萬化、而及物之功亦少。孟郊賈島之詩、酸寒儉陋、如蝦蟆蜆蛤、一啖便了、雖咀嚼終日、而不能飽人。惟杜少陵之詩、出入古今、衣被天下、藹然有忠義之気、後之作者未有加焉。
>
> 宋興二百年、文章之盛、追還三代、而以詩名世者、豫章黄庭堅魯直、其後学黄而不至者、近山陳師道無已。二公之詩皆本於

[2] 静嘉堂文庫蔵本。
[3] 以米澤市立図書館蔵南北朝復刻版を底本とする。
[4] 『山谷詩内集注』『山谷詩外集注』、学海出版社、1979 年。

老杜、而不為者也。其用事深密、雑以儒仏虞初稗官之説、雋永鴻宝之書、牢籠漁獵、取諸左右、後生晩學、此秘未覩者、往往苦其難知。三江任君子淵、博極羣書、尚友古人、暇日遂以二家詩為之注解、且為原本立意始末、以曉学者、非若世之箋訓、但能標題出處而已也。既成以授僕、欲以言冠其首、予嘗患二家詩興其高遠、読之有不可曉者、得君之解、玩味累日、如夢而寤、如醉而醒、痿人之獲起也、豈不快哉。雖然論画者可以形似、而捧心者難言、聞絃者可以数知、而至音者難説。天下之理、渉於形名度数者、可伝也。其出於形名度数之表者、不可得而伝也。昔后山答秦少章云、僕之詩、豫章之詩也。然僕所聞於豫章、願言其詳。豫章不以語僕、僕亦不能為足下道也。嗚呼、后山之言殆謂是耶、今子淵既以所得於二公者筆之於書矣。若乃精微要妙、如古所謂味外者、雖使黄陳復生、不能以相授子淵尚得而言乎、学者宜自得之可也。子淵名淵、嘗以文藝類試有司、為四川第一、蓋今日之国士、天下士也。鄱陽許尹序。

序文の中には主に黄庭堅の詩風の特色および詩歌史上の位置づけを述べている。「其用事深密、雑以儒仏・虞初稗官之説」のように、典拠や故事に深く関わっているのみならず、儒教や仏教、さらに稗官小説類を交えていると指摘するが、四十歳の「発願文」についてはまったく言及されていない。

中国の注釈から目を転じて、日本の室町時代から江戸時代に記録された「抄物」の資料に当たって前掲の序文の内容と比較してみたいと思う。

まず、両足院蔵『山谷抄』(「続抄物資料集成」第六巻所収)の冒頭に置かれる「山谷老人伝」に、

公奉仏最緊、過泗州僧伽塔、遂作發願文、痛戒酒色肉食、但朝粥午飯、如浮屠法、時元豊七年三月也。

とあり、山谷が「不飲酒・不食肉・不邪淫」と発願し、朝粥と昼食しか食べない仏教の戒律をきびしく守っていると取り立てて強調する。また、『山谷詩集注抄』(正保板本、高羽五郎「抄物小系」所収)

には、山谷を次のように述べている。

豫章黄庭堅　庭堅、字魯直、號山谷道人、魯直。

山谷　元豊七年、先生四十歳、徳平鎮ニイタ時、妻ガ死タゾ。其時、泗州僧伽大師ノ塔ノ前デ、発願文ヲカイテ、酒肉ヲ断ジテから、菜肚老人ト号スルソ。其後涪州へ流レタ時涪翁ト号ス。

元豊七年の発願文を紹介し、さらに黄庭堅の別号「菜肚老人」を付け加えた。中国の山谷詩の注釈書と比べると、明らかに違っているのは、日本の場合は室町時代から江戸時代にかけて専らに仏教の戒律を慎んで守っていて、とりわけ四十歳のときの「浮屠の法の如く「酒を飲まず、菜食し、そして女色を戒める」ことを重視する点にあると思う。

さらに『山谷抄』の講解や注釈の内容を検証してみると、黄庭堅の「発願文」は二十巻の中に頻繁に引用されていることがわかる。いくつか代表的な用例を挙げてみよう。

○巻一「宿旧彭沢懐陶令」的「属予剛制酒　無用酌杯盎」的五山注：

我ハ断酒スルホトニ。酒ヲマイラセハ。我モ相伴二。一杯ノウテコソアレ。我ハ断酒ヂヤホトニ。エマイラセヌソ。此句二依テ。元豊七年ノ詩トモ云ソ。谷ハ元豊七年ノ歳。僧伽ノ塔ノ前テ。発願文ヲカイテ。酒肉淫ヲ断ス。是ヲ以テミレハ。三年太和へ行ク時ト。見ルハチカウソ。七年ノ時。断酒スルコトヲ。三年二預ハ。何カ云ハウソ。三年太和へ行時。違例ヲバシメ。酒ヲ飲ヌカソ。

山谷が詠んだ作品に出てくる「制酒」の解釈について、日本五山の詩僧たちはすぐ「発願文」の「酒を戒める」を連想する。ほかにも巻七「次韻答王眘中」首句的「有身猷縛律」について、次のような注釈が施されている。

谷カ自謂ト云ソ。一義ニハ。先生ハ。モト僧伽大師塔前テ。酒肉淫ヲ断ト。願ヲ起テカラ。御僧ノ様ニ。ナツタソ。持律ニ身ヲモチテ、戒ヲ破ラヌホトニ。全身カ律ニ。縛セラレタソ。

山谷の身が戒律に拘束される理由は仏様の前で願文を書き、誓っ

たからである。と五山僧たちは説明し、お坊さんのようだとも言っている。それに巻八「戯答趙伯充勧莫学書及為席子沢解嘲」の詩の「平生飲酒不尽味　我塊饞肉如嚼蝋」についての注釈はつぎのようである。

我ハ発願文ヲカイテ。酒肉淫ヲダンズルソ。去ホトヌソ。魚ノウマイモ。蝋ヲカム如ナソ。

ここも山谷は酒・肉・女色を断ったので、美味の魚もまるで味の無い蝋のようなものであると述べている。そしてその続きの「我酔欲眠便遣客　三年窺牆亦面壁」の一聯を

酒肉淫ヲ断ツマテモナイ。座禅ヲスルソ。注：谷ヲ女房カ闕ハトモ。座禅ヲチメイル。上ノ闕ハ女房ソ。下ノ面壁ハ座禅ソ。…亦ノ字ニ淫事を断ツ心カアルソ。上句ヘカケテソ。

と解している。やはり黄庭堅は女色に近づかない発願をしたので、そのかわりに「面壁」、すなわち坐禅の修行に取り組む。巻九「出礼部試院王才元恵梅花三種皆妙絶戯答三首」その二の「旧時愛菊陶彭沢　今作梅花樹下僧」の一聯に関しては、南宋の任淵注は、先例に元稹の作「禅僧偶向花前定　満樹狂風満樹花」を指摘するだけであるが、五山の抄物の解釈は次のようなものである。

谷モモトハ大酒ノミテ。淵明カ様アリタレトモ。中年已来ハ。断酒ヲメアルホトニ。風流ナ御僧ノヤウナソ。

直ちに山谷の「持律不飲」を引用し、「樹下の僧」も山谷本人と見なし、「風流僧人」とも呼んでいる。また第三首は「病夫中歳屏栝杓百葉緗梅触撥人」と詠じ、五山注は、

中年断酒ヲメ杯ヲバ手ニトラヌソ。…酒ガノミタケレトモ。何モ支用ハ断酒ソ。

とあり、繰り返し発願戒酒のことに触れる。そして巻十「嘲小徳」詩題にある「小徳」は発願文が書かれた年に生まれた山谷の庶出の男の子の名前である。母についてはくわしくわからない。山谷の発願後に、破戒したか否かの異論のある作品であるが、「抄物小系」の『山谷抄』の解釈は、

谷カ子ソ。相カ事ソ。小児テ。名ヲ四十ト云ソ。…谷ハ初ハ。謝子厚カムコソ。其妻無子死スルソ。去程ニ。淫欲ヲ断メ。酒肉マテ断ソ。

とあり、特に山谷を批判する記述は見られないが、しかし、江戸時代に出版された『帳中香』の万里集九の明応七年（一四九九）の跋文[5]には次のように記している。

元豊七年甲子、山谷之妾誕小徳、故呼其字為四十歟。蓋山谷是時四十也。小徳之誕、先輩往往彼発願以後而為破戒也。然先輩之論似不公、其作発願文、又誕小徳、同在元豊七年甲子。発願則三月、若其誕在三月以前則全不可為破戒。縦又在三月以後、不可亦為破戒。凡赤子之在胎内、經十個月誕出、胡為不推其通理耶。

万里集九は煩を厭わず、子供は懐妊十ヶ月で生まれるのを挙げて、発願時期と全く抵触しないことを唱え、五山の禅僧に山谷は破戒したのではないかという疑惑を極力、山谷の立場で弁護した。

実は南宋任淵以来の中国の山谷詩の注釈では殆ど顧みられなかった「小徳」と「発願文」の関係は、日本の「山谷抄」では重大問題として議論が繰り広げられた。日中の注釈を照らし合わせれば、中国の注釈は詩論の流れや詩作方法、或いは「出典」の提示を重視する傾向が一目瞭然である。一方、五山詩僧の注釈は、山谷の仏教に対する信仰心、そして仏僧のような行動を取っているかどうかが非常に細かく検討されていることがよくわかる。両者の相違も自ずと現れているといえよう。

三、「坐禅」・「飲茶」

黄山谷は臨済宗の黄龍派に属する中国詩人の中の敬虔な仏教信者としても有名である。黄龍慧南の弟子晦堂祖心の教えを受け、同門で修行する法眷に、死心悟新や霊源惟清ら名の知られる禅僧がいる。日本の五山禅僧たちが山谷の仏教との具体的な結びつきに特に興味

[5] 東京図書館蔵。

をもち、『山谷抄』にこの傾向を垣間見られる記述が多く見られる。それぞれ例を取り上げながら、五山禅僧たちが思い描いた山谷像を明らかにしたい。

例えば巻十六「自巴陵略平江臨湘入通城」という詩については、次のように説明されている。

> 黄龍山ニ至テ。惟清禅師ニ謁スルソ。谷カ法ノ法眷ソ。黄龍慧南ノ弟子。晦堂祖心ノ弟子ニ山谷ト。

山谷は中国の黄龍派の禅宗法系の中にどのように組み込まれているのかを述べる。

禅宗で行う坐禅を通して山谷の詩を解するところが多く見られる。用例を示し、検討してみよう。巻六「次韻寄晁以道」という詩にある「念公坐臘禅　守心如縛虎」の解釈は

> 坐禅ズキテ。有ホトニ。イツモ坐禅ヲシテ。心ヲトリツメテ。守事ハ。虎ヲ縛ル様ニソ。有ラウソ。

とあり、山谷はいつも坐禅をすると述べた上で、坐禅の長所を強調する。また「良為鼻祖來　渠伊為伴侶」二句には

> 一切善悪是非愛着ハ。一心ノ中カラ来ソ。去ホトニ。人ノ眷属ノ多イ様ニ。妄想煩悩カ。一心ノ上カラ来ソ。渠ハ無明煩悩ソ。此人ハ坐禅ヲハスレトモ。法ニ著スルホトニ。一心中カラ無明煩悩ノ起様ソ。カマイテ法着ナシソ。一義ニ坐禅ヲハスレトモ。法着ノ心カ。有ホトニ妻ニホレツナントスルソ。此詩全篇。法着ハカリト。妻ヲモチタトニ見ソ。

と注釈し、坐禅と法着の関係を説いている。また「僧景宗相訪寄法王航禅師」詩の初句「抱牘稍退鳧鵞行　倦禪時作橐駝坐」の『山谷抄』は、

> 谷カ坐禅ズキテ有ホトニ。朝カラ退テ。坐禅ヲスルソ。

とあり、ふたたび山谷の坐禅好きに触れて、早朝から退ければ座禅するという。

そして次の句の「忽憶頭陀雲外　人閉門作夏與僧過」の五山の注は、

> 又ハ寺ソ。此寺ニ航禅師ノ僧達ト坐禅禁足シテソ。イラレツラ

ウソ。一義ニ。谷カ願事ソ。僧達ト坐禅シテ。イイデソ。

とあり、一説には山谷が僧侶たちと一緒に坐禅するのが願い事だそうである。

巻八「戯答趙伯充勧莫学書及為席子沢解嘲」一首の注「身如朝露無牢強　翫此白駒過隙光」の注釈にも、

其ノ間ニ坐禅過ルハ。目ニハ見エマイソ。

と見え、その間は坐禅で過ごすと述べたあと、そして「従此永明書百巻　自公退食一炉香」の注に

永明寿禅師ハイカレヌソ。奇特ナ人ソ。此人ノ書カ百巻アルソ。宗鏡録ソ。手書タテヲハ取ヲイテ。今日ヨリ后。退ノヒマニハ。対炉宗鏡録ヲマフリテユウスソ。谷ハ黄竜宗ソ喜読此録ソ。

と五山の注釈は大胆に黄龍派に属する黄庭堅は、永明寿禅師の『宗鏡録』を愛読すると、事実のように述べる。それに巻十三「次韻答斌老病起独遊」詩の「万籟寂中生　乃知風雨至」の解釈をめぐっても、

第八識ノ事ソ。多慮ハ。多念ソ。人々ノ上ニ。是非善悪。色々ノ事ノアル。是ハ一心カラ起ソ。是カ坐禅ノ病ソ。去ホトニ善トモ。悪トモ。ハクレハ。即禅病ゾ。一念不起ノ処カ。ヨイ坐禅ソ。妄相ヲ止くセバ。禅病煩悩。即菩提ノ理ヲ。

いい坐禅はどういうものか、そして坐禅の効用を論じ、さらに禅病にも言及している。巻十三の「再次韻兼簡履中南玉三首」その二の「道機禅観転万物　文采風流被諸生」一聯の五山の注は次のようである。

此人ハ坐禅ヲ。スルホトニ。前境ニハ。転セラレヌソ。万物ヲコチカラシタイママニスルソ。禅モ道モ。熟タソ観ハ。観念。観法ノ心ソ。此様ニ。法物ナカト思ヘハ。風流ナ。文章者ゾ。

大いに坐禅と道、そして観想の関係や、それら禅の修業は風流文章を完成させる効果もあると論じられている。任淵の注は柳子厚（宗元）と杜甫の句が引用されているだけで、禅の修業などには言及していない。

以上、検討してきたように、中国の黄庭堅詩の注釈と比べれば、日本の五山詩僧の「山谷抄」には、禅僧の毎日に深く関わっている坐禅や信仰が随所強調されていることは、いちだんと際立っている。山谷を禅僧化する五山僧たちの心の中の願いが見て取れるといえよう。

続いて、山谷詩集に茶葉や茶を飲む作品は少なくない[6]。例えば巻二「以小団龍及半挺贈无咎并詩用前韻為戯」の一句目「我持□圭與蒼璧　以暗投人渠不識」の注は

> 茶ヲ飲テ。風流ナ人カナ。夜光ノ玉ヲ。暗ニ投スル様ニ。茶ヲ知者カ無ソ。

と述べ、お茶を飲む人は風流の士と文化的な価値を認め、褒め称えている。しかし、南宋の任淵注の前半は、書経と周礼が引かれ、後半は庾信と杜甫の句が紹介されていて、風流の士と飲茶については全く言及していない。巻六「以双井茶送孔常父」の「心知韻勝舌知腴　何似寶雲與真如」の注の内容は、次のようである。

> 六経ノ風韻ノ。勝タヲ知リ。舌ニハ道ノ腴タ処ヲ知ソ。去ホトニ。此茶ヲモヨウ知ウスソ。(中略) 六経ノ味ハ此茶ニハヲトリソ。此時ハ。宝茶真茶トハ。此双井ノ茶ヲ云ソ。(中略) 一義ニ。谷カ茶ノ風韻ヲモ。味ヲモ知タカ。

ここも山谷を本当の茶の風韻と味を知っている人というような評価を下している。さらに巻十六「戯答荊州王充道烹茶四首」その一の「三徑雖鋤客自稀　醉鄉安穩更何之」の注釈に、

> 酒ヲ好ム他ニ。更ニ茶ヲ飲ミ。谷ニモクルルソ。ヤラ不審ヤ。酒過テ。茶ヲモ飲カト云ニ。酒バカリテハ。胸中カムサムサトセウズホトニ。茶ヲ飲テ。子ノムサムサトシタヲシ洗テ。詩ヲモ作ラウト思テ。茶ヲノムカソ。(中略) 一義ニ老翁ハ。王玄テヲイテ。谷カ断酒スルホトニ。サテ茶ヲ薦テ心ヲスズクトソ。詩作レト云ソ。

と見えて、はじめに詩、酒、茶の相互関係にふれ、最後は酒を断じ

[6] たとえば、「煎茶賦」は当時の煎茶の流行が詳しく述べられている。ほかに団茶の功を述べる「以團茶洮州綠石研贈無咎文潛」詩などがある。

てから、茶を好み、詩も詠じたと説明する。最晩年に宜州（広西省宜州市)に流謫されたときに詠じた巻二十「以椰子茶鉼寄徳孺二首 」の首聯「碩果霣林梢　可以代懸匏　□持二十年　煮茗當酒肴」の注は下掲のとおりである。

> 我ハ今宜州ヘ流レテ。魑――ノ食ニ成ルソ。去程ニ次第ニ道具モイラヌ。御僧ノ様ニ。行脚デタチテ行ホトニ。煎茶ノ道具モイラヌ。

都からすると、宜州という処は遠い辺境の地である。山谷はまるでお坊さんの風姿や格好をして辺地の椰子を使って茶の湯にする。あたかも出家の禅僧と同じく各地に行脚し、もう煎茶道具も要らないほど、極めて高い境地になっていると述べている。禅僧と茶について、芳賀幸四郎氏は「茶禅一味の思想は、まさにこうした考え方の伝統を受けたもので、茶の湯が禅と密接な関係をもって興隆した室町後期において成立したと推定される。（中略）ついに『禅茶録』にいたって、『茶意は即ち禅意也。故に禅意を捨て外に茶意なく、禅味を知らざれば茶味も知られず』という積極的でかつ堂々とした茶禅一味の説に結晶し、爾後今日にいたってのである」と詳しく分析している[7]。

四、おわりに

中国のもともとの黄魯直（山谷）の注解と、日本室町時代の抄物『山谷抄』の注釈を詳しく読み比べ、その相違をじっくり読み解いていくと、抄物の講釈には、「発願文」「坐禅」「飲茶」の三つがよく出てくる。任淵以来の中国の山谷詩注と一線を画す。

山谷があつく中国の黄龍派の禅宗思想を信奉していたことは、恐らく異論の無いところであろう。しかし中国ではその詩を理解するとき、特に強調されることは無かった。主に詩の典故、用事等の詩作法を中心に注釈が施されている。一方、酒・肉・女色を断つと仏

[7] 芳賀幸四郎「茶禅一味」『禅と能楽・茶』（禅と日本文化 3、熊倉功夫編、ぺりかん社、1997 年 7 月)。

前で誓った「発願文」「坐禅」と「飲茶」の三つの共通点はともに禅宗思想と深く関わっていることである。

五山の禅林の詩僧たちは、中国漢詩上の杜甫や蘇軾の継承者たる江西詩派の祖よりも、むしろかれらの身分と立場に近い仏教徒の姿を山谷に求める。仏門の厳しい戒律を自ら守り、あたかも僧侶のような五山の山谷像が徐々に造形されていったと思う。その具体的な形象は次の『山谷抄』の注釈から垣間見ることができると思う。一つは巻八「謝景叔恵冬笋薤酥水梨三物」の「玉人憐我長蔬食　走送厨珍自不嘗」の注は、

> 玉人ハ十徳アル人ソ。我ハ肉食ヲキラウホトニ。僧ノヤウニ一生野菜腹テイルソ。其ヲ景――カ憐テ、イソイテ此三色ヲ谷ニ送ソ。景――カ我ハクハイテクレタソ。

とあり、また巻九「出礼部試院王才元恵惠梅花三種皆妙絶戯三首」その二の「旧時愛菊陶彭沢　今作梅花樹下」は

> 旧――谷モモトハ大酒ノミテ。淵明カ様アリタレトモ。中年已来ハ。断酒ヲメアルホトニ。風流ナ御僧ノヤウナソ。

とある。そして巻十三「謝楊履道送銀茄四首」その三の「白金作顆非堆成　中有万粟嚼軽輕氷」は、

> 戎州ニハ。夏ハ野菜モ無ニ。此茄ヲクレヲレテ。一倍ウレシイソ。谷ハ定斉テ。肉食モセイテ。僧ノ如テ。イルホトニソ。真個在家ノ僧ソ。僧ニ髪カ。有マテソ。

と見え、さらに巻十四「病起荊江亭即事十首」その一の「翰墨場中老伏波　菩提坊裏病維摩」は、

> 仏道ヲ修スル者ノイル処ゾ。菩提ハ。仏道ノ至極ソ。山谷カ我モ在家ノ身テ仏道ヲ修ソ去程ニ在家僧ト云ソ。

と[8]あり、一生「僧侶のように」菜食しか食べないとか、風流で雅な

8　ほかにも、「鄒松滋寄苦竹泉歐橙麴蓮子湯三首」その二の「松滋解作逡巡麴壓倒江南好事僧」の注は、

> 山谷カ。我コソ物コノミデ有ルホトニ。カカル事ヲセウスニ。我ハエセヌニ。貴方ハ此酒ヲツクルハ。我ヲ圧倒セラレタソ。酒肉淫ヲ断ツホトニ。イツモ在家僧ト云ソ。

とあり、巻十五「戯答王子予送凌風菊二首」その一の「病来孤負鸕鷀杓　禅

僧侶であるとか述べて、本当の在家の僧であるとして、山谷は五山僧に同化されていく。中国の詩人黄庭堅は日本に渡ると、五山の禅林では禅僧のように変貌し、詩僧たちと一体になっていることが明らかになった。『山谷抄』の諸本を理解するためには、まだまだ多くの課題が残されている。それらを今後の課題にしたいと思う。

参考文献

荒井健注（1963）『黄庭堅』、「中国詩人選集」、岩波書店。
古典文学研究資料彙編（1979）『黄庭堅與江西詩派』上下巻。
黄啓方（2006）『黄庭堅與江西詩派論集』、国家出版社。
上村観光編（1936）『五山文学全集』、五山文学刊行会。
同前（1906）『五山文学小史』、裳華房。
玉村竹二編（1967）『五山文学新集』、東京大學出版社。
安良岡康作（1959）『五山文学』、岩波書店。
堀川貴司（2011）『五山文学研究：研究と資料』、笠間書院。
市木武雄編（2002）『五山文学用語辞典』、続群書類従完成会。

付録

五山禅僧が黄庭堅やその詩論を詠みこんだ作品（『翰林五鳳集』によるり、繁体字のまま引用する）

板蒲團入眼中」一聯の注は、
我ハ病来酒ヲノマズ。サルホトニ。眼中ニハ。ヲ僧ノヤウニ。
とある。また、巻十六「謝胡蔵之送栗鼠尾画維摩」の「頗知君塵外物　真是我眼中人」の注は、
維摩ハ在家菩薩ソ。我ニヨウ似タソ。ワレモ其身ハ在家デ。心ハ僧ノ如ナソ。眼中人ハ。知音ト云心ソ。言ハ。我能知維摩法門ソ。
とある。巻十八「題默軒和遵老 」詩の「平生三業淨　在俗亦超然　仏事一盂飯　横眠不学禅」には、
喫茶喫飯ノ心ニ。一盂飯ヲ喫スルモ。即仏事ソ。サテ子タケレハ寝。起タケレハ寝。起タケレハヲクル。自由ヲ得タソ。禅ニハ縛セラハ背（中略）此四句ハ。谷カ我事ヲ云ト見ソ。山谷ハ。形ハ俗ニ在テ。心ハ僧ソ。殊に定斉ヲシ禅に。禅ニ参シテ。在家僧テアルホトニ。
と注釈している。巻十九「謝榮緒割麕見貽二首」の注に、
此二十年ハカリハ。僧ノ如クニ。断酒定斎デ。カンソニシテ過タソ」などがある。
が見えるなど例が多い。

1	P56 上 第 16 行	惟高 （不詳）	甲斐武田氏贈大德寺僧詩和韻 紫野龍寶下之佐公禪衲者。甲州使君與許交遊也。以故出洛。得々來詣禮謁使君。去夏之比。及歌驪駒。冗賦一詩見餞行。可謂錦旋榮矣。佐衲歸來。傳一詩於洛下老宿。欲和篇。故使君。其佳篇。也。蘇新黃奇。一洗昏眼矣。使君者吾朝騎射名家。而為武門上將。且又政瑕論文詩詠。猪毫磨墨。筆陣掃軍。近代騷將也。孰弗稀譽耶。千里之外。有寄遐想矣。諸宿擊節。和陽春曲。儂已老。凍吟亦苦澀。雖然。難獲默止。維時窻腸雪不免吹寒竿於列赧。拙和一章奉投油幕下云。
2	P57 上 第 14 行 ～	策彦周良 （1501～ 1579）	東氏帶刀公疇昔之夕來話。話次圍爐曰。明早賦小詩。述昨宵之謝。語意有坡谷之氣象。不可不和之。因依其韻。伸卑臆云。
3		策彦周良	風月胸襟點不塵。近隣相訪往來頻。 宋詩今合二家一。黃好奇兼蘇好新。
4	P265 上 第 14 行	天隱龍澤 （1422～ 1500）	江西詩祖鬢如霜。謫在黔南天一方。 可怪晦堂清話後。愛梅僧愛桂花香。
5	P265 上 第 16 行	宜竹	句法傳家老拾遺。鬼門關外鬢成絲。 汴都季運杜鵑雨。不采詩中再拜時。
6	P265 下 第 1 行	蘭坡景茝 （1418～ 1501）	庵扁跨牛投此生。江南野水眼俱明。 詩情不被秋將去。岩桂吹香風露清。
7	P265 下 第 3 行	春澤永恩 （1510～ 1574）	趙宋文章二百年。詩名獨許老庭堅。 怪得曾侍晦堂室。句句看來曹洞禪。
8	P265 下 第 5 行	南江宗阮 （1386～ 1463）	懷素無錢購剡藤。芭蕉殘墨字稜稜。 可憐傳法宜州客。亦買雞毛貪似傳。山谷墨帖
9	P265 下 第 7 行	九鼎竺重 （不詳）	魯直書如詩出奇。宋寒李俗豈肩隨。 暮年閑寫黃庭卷。眼暗雞毛筆一枝。看黃魯直帖
10	P265 下 第 9 行	瑞溪周鳳 （1391～ 1473）	翩翩橫逸走龍蛇。元祐腳推黃九家。 史局晚年椽樣筆。回文餘力學長沙。題山谷帖
11	P265 下 第 11 行	蘭坡景茝 （1418～ 1501）	熙寧變法苦蒼生。禽亦朝朝訴此情。 試聽一犁殘雨外。南村聲答北村聲。讀山谷和答禽語詩
12	P265 下 第 13 行	琴叔景趣 （－1507）	去年租重苦蒼生。軟語涪翁陳此情。 布穀何知無袴著。南村鳴斷北村鳴。
13	P265 下 第 15 行	梅陽章杲	蘇門名士鬢皤然。治縣最欣民餉田。 禽語莫將詩語答。元豐宰相是啼鵑。
14	P265 下 第 17 行	江西竜派 （1374～ 1446）	雙井有賢猶未徵。釣臺高聳幾層層。 只須夢作白鷗去。一箇冥鴻嚴子陵。黃魯直雙井釣臺圖

15	P266 上 第 2 行	三益	魯直文章烏鉢新。煎茶一賦轉精神。 由來土地因人顯。先記我家雙井春。讀魯直煎茶賦
16	P266 上 第 4 行	雪嶺	當日江南出寶薰。誰頌黃九避塵氛。 豈圖五代興亡後。睡鴨春閑一穗雲。讀山谷帳中香
17	P266 上 第 6 行	雪嶺	李主帳中螺甲烟。涪翁吟取有新篇。 寶薰自入先生集。一燧黃雲五百年。
18	P266 上 第 8 行	策彥周良 （1501～ 1579）	涪叟皤然暮景斜。養蘭好寄老生涯。 西川東洛雖分黨。塵裡偷閑愛此花。山谷愛蘭圖
19	P266 上 第 10 行	宜竹	蒼頭日訴倉無肉。赤腳年求衣不綿。 使得頑奴在床下。夜深煖老伴孤眠。跋魯直錫奴詩
20	P266 上 第 12 行	春澤永恩 （1510～ 1574）	涪翁老去奈爭衣。忍凍孤吟煖足稀。 內苑溫湯一瓶裡。脚婆亦是太真妃。讀涪翁煖足瓶詩